

蘇軾詩論稿

山本和義

清水谷高等學校

一 序

北宋の詩人・蘇軾（東坡居士1036～1101）の詩にみられる「のびやかさ」が、ななに基くものであるかを探るために、小論を試みる。

まず、「青山久與船低昂」の章で、蘇軾のものの見方について考え、「吾生如寄耳」の章に於て、人生を如何に理解していたかを論じ、最後に、かれの「委順の思想」を明らかにするために、「遇境即安暢」の章を設ける。

もとより、大詩人の全貌は捉え難いが、「蘇軾論」のためのノートの一部として、本稿を草する。

二 「青山久與船低昂」

蘇軾の最も蘇軾らしいものの見方から採りあげよう。

蘇軾の詩集を繙くと、同様の表現を反覆使用した例が、他の詩人に比較して、より多く散見するが、次の二首の詩も、その一例である。

「頽口を出で、初めて淮山を見る。この日壽州に至る」（王文誥・蘇文忠公詩編注集成卷六、以下これにならう）と題する詩に、

我行日夜向江海 我が行 日夜 江海に向う

楓葉蘆花秋興長 楓葉蘆花 秋興長し

長淮忽迷天遠近 長淮 忽ち天の遠近に迷い

青山久與船低昂 青山 久しく船と低昂す

壽州已見白石塔 壽州 已に見る 白石塔

短棹未轉黃茆岡 短棹 未だ轉ぜず 黃茆岡

波平風軟望不到 波平かに風軟かなれど望み知らず

故人久立烟蒼茫 故人久しく立つ 烟の蒼茫たるに

詩は、熙寧四年（1071）、壽州に向つて淮水を下る船中で作られた。

また、次の詩は、「李思訓（建見651～716）の畫く長江

絶島の圖」(卷十七)と題される。

山蒼蒼 江茫茫 山蒼蒼たり 江茫茫たり

大孤小孤江中央 大孤小孤 江の中央

崖崩路絶猿鳥去 崖崩れ路絶えて猿鳥去り

惟有喬木攙天長 惟だ喬木の天を攙して長きあり

客舟何處來 客舟 何處より來る

棹歌中流聲抑揚 棹歌 中流に聲抑揚す

沙平風軟望不到 沙平かに風軟かなれど望み知らず

孤山久與船低昂 孤山 久しく船と低昂す

峨峨兩烟鬢 峨峨たる兩烟鬢

曉鏡開新妝 曉鏡 新妝開く

舟中賈客莫漫狂 舟中の賈客 漫らに狂する莫かれ

小姑前年嫁彭郎 小姑(一作孤)は前年彭郎に嫁す

李思訓の描いた「長江絶島圖」を見てうたつたもので、

元豐元年(1078)の作品である。

この二首の詩を比較するとき、その表現の類似に驚く。

とくに、前詩の「青山久與船低昂」と後詩の「孤山久與船

低昂」、あるいは、前詩の「波平風軟望不到」と後詩の「沙

蘇軾詩論稿(山本)

平風軟望不到」、この二例は、全く同じ表現である。この場合、後詩の表現は、著しく前詩の影響を受けていると考えねばならない。「長江絶島圖」を見た蘇軾の脳裡に、七年前の経験が、ありありと甦つたに相違ない。同時に、前詩が即刻心の中で反芻されたであろう。このことは、前詩にうたわれた情景が、蘇軾にとつて如何に印象深かつたかを示すとともに、作者のこの作品に對する愛着が、非常に強いものであつたことを、推量させる。ここに採りあげた二例の中でも、とくに「青山久與船低昂」の詩句は、その新鮮さが魅力である。「青山」の詩の場合、作者は、淮水を下る船中であつて、船の動搖につれて、あるいは高く、あるいは低く、その高低を自在に變えて眼に寫る青い山に魅惑されている。「山」といえば、元來動かぬものとして理解し表現するのが、通例であつた。しかし、その見方は、固定された視點に基くものでしかなく、もしその視點が自由による位置を變えたとすれば、山の高低も、自ら變化する筈である。今、蘇軾が魅惑されたものは、常識的には不變として考えられて來たものが、實は變化するのだという、

この點に存する。

従來、自然は、固定された人間をとりまいて、さまざま
な姿態を現出するものとして詠われるのが、通例であつた。
盛唐の詩人・杜甫(712~770)に於ても、それは著しい。

杜甫は、大曆元年(766)、五十五歳の身を夔州に移したが、
名勝白帝城にことよせて、不運の我が身を嘆じた七言律詩
「白帝城の最高樓」(杜少陵集詳註卷十五)は、次のように
うたわれている。

城尖徑仄旌旆愁 城尖り徑仄きて旌旆愁う

獨立縹緲之飛樓 獨り立つ 縹緲の飛樓に

峽坼雲龍虎臥 峽坼け雲龍りて龍虎臥し

江清日抱龍龜遊 江清く日抱きて龍龜遊ぶ

扶桑西枝對斷石 扶桑の西枝は斷石に對し

弱水東影隨長流 弱水の東影は長流に隨う

杖藜歎世者誰子 藜を杖き世を歎ずる者は誰が子ぞ

泣血迸空迴白頭 泣血 空に迸しらせて白頭を迴らす

杜甫をとりまく全ての景物が、かれに向つて凝集してい
る。眼に入る自然は、ただそこに存在するものとしてある

のではなく、詩人の感動をより強烈にせんがための存在と
して、奇怪なまでの姿をもつて、押しせまりつつある。こ
れを背景にして、白頭の詩人は、嚴然たる姿で、クローズ
アップされる。淮水を下る船中の蘇軾と白帝城に立つ杜甫
とは、その姿勢が、きわめて對蹠的である。杜甫の場合、
彼をとりまく全てのものを、不動の人間を強調するものと
してうたうのに對し、蘇軾は、兩者を自在に動く相對的な
關係の中で捉えようとする。蘇軾のこの態度は、次の例で、
さらに確めることが出来る。元祐五年(1090)、杭州の知
事であつた時の作「連日、王忠玉・張全翁(璠)と西湖
に遊び、北山の清順・道潛の二詩僧を訪ね、垂雲亭に登り、
參寥泉を飲み、最後に唐州の陳使君(師錫)を過ぎ夜飲す。
忠玉詩あり、次韻して之に答う」(卷三十二)の第一句か
ら第四句までは、

北山非自高 北山 自ら高きに非ず

千仞付我足 千仞 我が足に付す

西湖亦何有 西湖 亦た何か有る

萬象生我目 萬象 我が目に生ず

蘇軾は、まず北山の高さについて、北山もそれ自體が高いといふのではなく、それを見る視點の低さが作り出した一現象であるとうたう。次には、天下の名勝西湖も、自分の眼を通して、はじめてその美觀があるのだという。かつて淮水の船中で青山を眺めた時と同じ視點の動きは、この詩に於ても、認められ、さらに哲學的に深められたものとして、讀みとることが出来る。第四句の「萬象生我目」の一句には、「我目」の重要性に對するはつきりした自覺の存在が、明らかな型で示されている。次の詩は、前詩には先だつが、元豐七年（1084）、黃州を離れて筠州に赴く際、廬山に遊んで作つたもので、蘇軾の代表作として著名である。詩は、「西林の壁に題す」（卷二十三）と題され、のちに乾明寺の名でも呼ばれる西林寺の壁に書きつけられた。

横看成嶺側成峰 横看すれば嶺と成り側には峰と成る

遠近高低總不同 遠近高低 總て同じからず

不識廬山眞面目 廬山の眞面目を識らざるは

只緣身在此山中 只えに身の此の山中に在るに緣る

廬山の場合も、視點を變えることによつて、千態萬姿を

蘇軾詩論稿（山本）

見ることが出来る。この詩が人口に膾炙したのは、何よりもその新鮮なものの見方の持つ魅力に因がある。從來、この詩については、禪との關係を重視し、咸通錄や華嚴經を引用する注家が多い。もとより、この詩が禪と深い關係にあることは認められるが、王文誥の「凡そ此の種の詩は、皆一時に性靈の發するところである。若し胸中に釋典があり、しかる後鑪錘して之を出したとするならば、則ち意味は、索然たる（そこあさい）ものになつてしまふ」（卷二十三「題西林壁」語案）という批判は、やや皮相な見解かも知れぬが、一理を含んでいよう。すなわち、この詩が、釋典を揀りかえたものでないことは明瞭であつて、詩と釋典との關係は、さらに深層で探究さるべきである。「題西林壁」の詩は、蘇軾の平常のものに見方に根差すものであり、完全に蘇軾自身の詩として讀むべきである。

上述の部分を整理すれば、蘇軾のものの見方の特徴は、固定した一つの視點からのみものを見るのではなく、つねに自分の視點を移動させ、複數の視點からものを見るところにある。さらには、自分の視點を意識しながらものを見

ようとする。

このようなものの見方は、單に外界のものを見る時にのみ限定されてはいない。蘇軾は、彼自身をみつめる場合も、上述の如き態度を變えてはいない。

三 「吾生如寄耳」

蘇軾の生涯は、彼に先だつ多くの詩人たちがそうであつたように、浮沈に富む不安定なものであつた。この六十六年の生涯に、蘇軾は幾度も「わが生は寄するが如きのみ」と、詩にうたつた。

元祐元年（1086）に作られた「王晉卿（説）に和す」（卷二十七）と題する詩がある。元豐二年（1079）、御史臺の獄を出た蘇軾は、黃州へ責貶されたが、それから七年經つて、再び朝に召された。その時、同じく都に戻つた王説の詩に和したもので、その第十五句から第十八句までを引用すれば、

吾生如寄耳 吾が生 寄するが如きのみ

何者爲禍福 何者か禍福と爲さん

不如兩相忘 如かず兩ながら相忘るるに

昨夢那可逐 昨夢は那ぞ逐うべけんや

私の一生は、假のものではないのに、どうして災禍だの幸福だのを區別することがあるうか。どちらも忘れてしまふにこしたことはない。一たび覺めてしまつた夢はもう逐うことができないのだから。

元豐三年（1080）、黃州への旅次、「淮を過ぐ」（卷二十）

と題する詩を作つたが、その第十一句から第十四句までを引用すると、

吾生如寄耳 吾が生 寄するが如きのみ

初不擇所適 初より適く所を擇ばず

但有魚與稻 但だ魚と稻とあらば

生理已自畢 生理は已に自ら畢る

私の一生は、假のものでしかないのだから、はじめから適くところを選んだりはいらない。ただ魚と米とさえあれば、生命の維持は大丈夫なのだから。

同じことは、その晩年、建中靖國元年（1101）、虔州を

過ぎた時にも、繰返してうたつている。「鬱孤臺」（卷四

十五)の最初の部分は

吾生如寄耳 吾が生 寄するが如きのみ

嶺海亦閒游 嶺海亦た閒游

私の一生は、假(かり)のものでしかない。五嶺や海南島に彷徨(わづら)うのも、またつれづれを慰める旅なのだ。

蘇軾は、さまざまな機會に、人生の「如寄」を繰返してゐる。人生を「寄」なるものだという考え方は、佛教の世界で強調される。しかし、佛教に於ては、人間は三世を通じて生死を超えて存在しうるといふ立場から、現世に於ける人間の営みが、きわめて短く儂い存在であることを強調するものであり、それは、死という不可避の問題をどう理解し、それにどう對處するかに重點のある思想だといふことができる。蘇軾は、佛教に近づいた詩人であり、當然このような世界觀の影響を受けていたであらう。しかし引用した三首の例をみれば、そこには、死という問題に發展するような發想は讀みとれない。では、蘇軾の「吾生如寄耳」といふ言葉を、どう理解するのが正しいのであらうか。人生を「如寄」とうたつたのは、蘇軾を最初とするのではな

蘇軾詩論稿(山本)

い。古くは、漢代の古詩十九首(文選卷二十九)に見ることが出来る。「驅車東門」の中に、

浩浩陰陽移 浩浩陰陽移り

年命如朝露 年命 朝露の如し

人生忽如寄 人生忽として寄するが如く

壽無金石固 壽は金石の固き無し

また、曹植(192~232)も、「浮萍篇」(玉臺新詠卷二)

の第十九句以下に、

日月不常處 日月常には處らず

人生忽若寓 人生忽として寓するが如し

悲風來入懷 悲風 來りて懷に入り

淚下如垂露 淚下ること垂露の如し

「寄」も「寓」も同じ義に解してよい。この二首の詩は、佛教に結びつけて考える必要はあるまい。中國人独自の發想によるものだとして理解してよく、蘇軾の場合も、大きくこの影響を受けているものと推量することができる。しかし、古詩や「浮萍篇」の場合と、蘇軾の場合とを比較すれば、そこに大きな距りが讀みとられる。前者に於ては、死に至

る時間の推移が速やかであることを嘆く言葉として、この一句はうたわれている。「忽」として死に近づきつつある儂い存在が、「寄」なのである。詩人は、人生が「寄」であることに涙している。しかし、蘇軾は、そうではない。

前に引用した三つの例に、「忽」の一字を加えて讀むことは出来ない。すなわち蘇軾は、死に至る時間の推移が「速やか」であることを嘆じているのではない。悲哀の情を伴う言葉ではないのだ。次の詩は、蘇軾のうたう「寄」を解明する端緒になる。熙寧二年(1088)の作「潁州にて初めて子由(蘇轍)に別る 二首」(卷六)の第二首は、

近別不改容 近別 容を改えず

遠別涕霑胸 遠別 涕 胸を霑す

咫尺不相見 咫尺相見 えずんば

實與千里同 實に千里に同じ

人生無離別 人生 離別無くんば

誰知恩愛重 誰か恩愛の重きを知らん

始我來宛邱 始め我れ宛邱に來りしとき

牽衣舞兒童 衣を牽きて兒童舞う

便知有此恨 便ち知る 此の恨あり

留我過秋風 我れを留めて秋風を過ぐ

秋風亦已過 秋風亦た已に過ぐるも

別恨終無窮 別恨 終に窮まる無し

問我何年歸 我れに問う 何の年か歸ると

我言歲在東 我れは言う 歲は東に在りと

離合既循環 離合既に循環し

憂喜迭相攻 憂喜迭に相攻む

語此長太息 此を語り長太息す

我生如飛蓬 我が生 飛蓬の如し

多憂髮早白 多憂 髮早くも白し

不見六一翁 見ずや 六一翁

弟蘇轍との別離の詩で、人生は、離合が循環し、憂喜が相攻む、ちようど「朔風に吹き轉がされる根なし草のようなものだ」と、嘆いている。(補注)「我生如飛蓬」の一句は、人間の營みが變轉常なきものであることを、いう。さて、この詩句は、前に引いた「吾生如寄耳」の詩句と、ほとんど同じ意味で、使われていると解してよい。「淮を過ぐ、」

(八〇頁下)の場合、私の一生は、「寄するが如き」ものであるから、はじめから行くところを選んだりはしないといふのであるが、この「寄するが如き」の意は、「飛蓬の如き」と同様の意味に読み、人生は轉轉と移りやすいものだから、はじめから行くところを選んだりはしないのだ、と解釋しうる。蘇軾のいう「吾生如寄耳」は、古詩の「人生忽如寄」の意よりも、「我生如飛蓬」に、より近いものである。依りどころなく轉轉と移り變る人生、それが「寄」なのである。ところで、蘇軾は、人生の「如寄」を、必ずしも悲哀の對象にはしていないといつたが、それは次の詩で確めることが出来る。元豐二年(1079)、徐州から湖州に赴くとき、弟蘇轍に寄せた「徐州を罷めて南京に往く、馬上筆を走らせて子由に寄す 五首」(卷十八)の第一首、

吏民莫拔援 吏民 拔援する莫かれ
 歌管莫凄咽 歌管 凄咽する莫かれ
 吾生如寄耳 吾が生 寄するが如きのみ
 寧獨爲此別 寧ぞ獨り此の別を爲さん

蘇軾詩論稿(山本)

別離隨處有 別離は隨處に有り
 悲惱緣愛結 悲惱は愛の結ぶに緣る
 而我本無恩 而るに我れは本より恩無し
 此涕誰爲設 此の涕は誰が爲に設くる
 紛紛等兒戲 紛紛 兒戲に等し
 鞭韁遭割截 鞭韁 割截に遭う
 道邊雙石人 道邊に石人雙び
 幾見太守發 幾たびか太守の發つを見る
 有知當解笑 知る有らば當に解く笑い
 撫掌冠纓絕 撫掌して冠纓を絶つべし

私は、ここ徐州の官を罷めて去るが、土地の人人よ、とめなideくれ。送別の宴では、哀しい音楽を奏さないでくれ。私の一生は、假のもので離合集散は常のこと、この離別だけではないのだから。離別は、到るところにあるもので、その悲哀は、愛着から惹き起こされる。ところで、私は、皆さまがたに何の恩愛も施しえなかつた。なのに、あなたかたは誰のために流涕なさるのか。こんな騒ぎは、あまりに幼稚だ——私の馬を進めなくしたりするのは。道ば

たに石人が二つ立つている。この石人たちは、太守の離任を、幾度も眺めてきたのだ。もし石人に心があつたならば、こんな騒ぎをみて、冠の紐が切れてしまうほど大笑いするに違いない。

この詩は、蘇轍に贈つたものではあるが、徐州の吏民への留別の作とみるのが、より適切である。人生は「寄」なるものであるが故に、離別は至るところにあるのだ。今、自分が経験しつつある離別は、その数多い離別の中の一つにすぎない。だから、それはとりたてて悲しむべきものではない。この詩に於ける「吾生如寄耳」の一句は、悲哀の情を表現するものではなく、逆にそれを解消せしめんとする知的な反省の言葉である。それは、前章で述べたものの見方の特徴に關聯する。別離に臨んでいる自分を、より高い他の視點から眺めてみる、換言すれば、自分の生涯全體を眺望しうる視點をとることによつて、自分の現在ある位置を正確に捉えようとする。この詩に於ける視點の移動は、さらにもう一つ石人を利用してなされている。今、経験しつつある離別も、決して自分だけのものではなく、数多い

前任者たちによつて、幾度も繰り返し行なわれたものであり、自分のそれは、数多いそれらの中のの一つでしかない。経験しつつある事態を、さまざまな視點から、確めようとしている。前に引用した「淮を過ぐ」(八〇頁下)も、同様の説明ができる。貶謫されて黃州に去ろうとする蘇軾の胸中には、不安を伴う激しい感情の動きが予想される。しかし、詩は、その感情をそのまま露呈したものではなく、その感情を押し鎮めたところから生まれている。人生は「寄」なるが故に、これから経験するであろう事態も、とりたてて嘆ずべきものではないのだ。「淮を過ぐ」にみられる蘇軾の特徴は、中唐の詩人・韓愈(768~824)と比較すれば、より明らかになる。宋詩の源流に位置すると考えられている韓愈も、蘇軾と同じような境遇を経験している。韓愈が、「佛骨表」のために憲宗の怒りを獲て、極刑は免れたものの、潮州の刺史に貶されたのは、元和十四年(819)のことであつたが、その時、兄弟の孫韓湘に贈つた詩は、「左遷されて藍關に至り、姪孫の湘に示す」(韓昌黎先生集卷十)と題する。

一封朝奏九重天 一封 朝に奏す 九重の天

夕貶潮州路八千 夕べに潮州に貶せらる 路八千

欲爲聖明除弊事 聖明の爲に弊事を除かんと欲す

肯將衰朽惜殘年 肯えて衰朽を將つて殘年を惜しまん

雲橫秦嶺家何在 雲は秦嶺に横たわつて家何くにか在

雪擁藍關馬不前 雪は藍關を擁して馬前まず

知汝遠來應有意 知んぬ 汝遠く來たる 應に意有る

好取吾骨瘴江邊 好し 吾が骨を瘴江の邊に取めよ

蘇軾の「淮を過ぐ」が、知的な反省を通してうたわれて

いるのに對し、この詩は、高揚した感情をそのまま露呈し

ている。その點では、前に引用した杜甫の「白帝城の最高

樓」(七八頁上)に近い性格を備えている。蘇軾は、黃州

に向いつつある姿勢のまま、未知の前途にも生命の新しい

「家」という固定されたものに執着する韓愈に對して、蘇軾の場合は、その執着を棄てて、より高い視點から、自分の今置かれてゐる事態を見、その前途を展望してゐる。この相違は、最後の詩句に至つて、愈々明らかになる。「ただ魚と米さえあれば、生命の営みは充分可能なのだ」という蘇軾は、その前途が、都を遠く離れた未知の世界であつても、そこに於ける自分の生活は、「寄」なる人生の一部分として、充分ありうるのだと考える。ところが、「よろしい！私の骨を瘴江のほとりて捨ててくれ」と韓湘に呼びかける韓愈の言葉は、新しい生活は、もはや不可能なのだという考え方に基いてゐる。ほぼ同様の條件下に置かれた二人が、此の如き對照を示すのは、人生を「寄」なるものだという思想の有無、自分の視點をどれだけ自由に動かさうるかかの相違に基くものである。

四 「遇境即安暢」

前章では、「吾生如寄耳」という考え方が、人生の不安定さに對して、ある一つの解決を與えていることを論じた

が、本章では、この考え方を、さらに積極的な面に於て捉えよう。

人間の営みの中には、哀樂・盛衰・禍福など、さまざまの姿をみることができる。これらについては、先に引用した「王晉卿に和す」(八〇頁上)の中に、蘇軾の考え方を覗うことが出来る。人生が「寄」なるものである以上、災禍も幸福も絶対的なものとは考えられない。人生が、變轉窮りないものだとなれば、災禍も幸福も、浮動的なものではなくなり、それに心を煩す要は、毫もない。一たび過ぎ去つたものは、再び捉えることが出来ないのだから。また、熙寧四年(1071)の冬、靈隱寺に遊んだ蘇軾は、李杞(堅甫)の詩に和した「靈隱寺に遊び、來詩を得、復た前韻を用う」(卷七)の中で、次のようにうたつてゐる。

盛衰哀樂兩須臾 盛衰哀樂 兩に須臾

何用多憂心鬱紆 何ぞ用いん 憂多く心鬱紆たるを

盛と衰、あるいは哀と樂、これらはすべて瞬時のものではない。だから、一つのものに執着して、何時までもよくよする必要はない。

これは、「吾生如寄耳」から、當然導びき出される考え方である。人間が幸福でありうるとすれば、それは、すべての執着を脱するところに、はじめて可能性がある。

嘉祐四年(1059)、二十四歳で故郷を後にした時の作「峽を出づ」(卷一)の中で、次のようにうたう。

入峽喜巉巖 峽に入つて巉巖を喜び

出峽愛平曠 峽を出でて平曠を愛す

吾心淡無累 吾が心は 淡くして 累無く

遇境即安暢 境に遇えば即ち安暢

舟が峽に入ると、兩岸の険しい巉山の眺めを喜び、峽を出ると、ひろびろとした風景を愛する。私の心は、淡く何のわずらいもない。それぞれの境に於て、つねにのびやかな氣持になる。

「吾心淡無累」は、「人生如寄耳」という考え方があつて、はじめて可能である。執着することがなければ、そこで「遇境即安暢」の境地に達することができる。「寄」なる人生に於て、次に遭遇する新しい事態を、それぞれ最高度に充實させようとする態度がある。これは、「委順の

思想」とでも稱してよからう。

蘇軾は、また熙寧十年（1077）、代州の學官蔣夔しやうゑから茶を贈られたのに對するお禮の詩「蔣夔の茶を寄せらるるに和す」（卷十三）の中で、次のようにうたつてゐる。

我生百事常隨緣 我せいが生せい百事つね常に緣えんに隨う

四方水陸無不便 四方すいりくの水陸 便べんならざる無し

私の人生は、このなりゆきに委せてゐる。私をとりまく水も陸も、すべて便でないものはない。

さらに同じ詩の中で、

人生所遇無不可 人生 遇あう所 可かならざる無し

南北嗜好知誰賢 南北の嗜好 知る誰か賢なる

人生に於て遭遇するもの、可でないものはない。だから、南北と北方では、嗜好に相違があるが、どちらが勝つてゐるかは、斷じ難い。

人生をなりゆきに委せて、次次に遭遇する境遇に抵抗しない、それぞれをエンジョイして行こうとする。これは、人生が「寄」なるものである以上、けつして袋小路には行きつくことはなく、新しい事態は、次次に展開するといふ

蘇軾詩論稿（山本）

確信に裏づけられてゐる。

紹聖二年（1095）、蘇軾は、流謫の地惠州で、上元の夜を迎えたが、その日の作「上元の夜」（卷三十九）の全部を擧げてみよう。

前年侍玉輦 前年 玉輦ぎよくんに侍し

端門萬枝燈 端門 萬枝の燈

壁月挂罽窓 壁月へきげつは罽窓きしやうに挂り

珠星綴觚稜 珠星しゆせいは觚稜こりやうに綴る

去年中山府 去年 中山府

老病亦宵興 老病 亦また宵まに興おく

牙旂穿夜市 牙旂がきは夜まの市ちを穿うち

鐵馬響春冰 鐵馬てつばは春はるの氷こに響なく

今年江海上 今年 江海ほんがうの上

雲房寄山僧 雲房 山僧さんそうに寄よす

亦復舉膏火 亦また復また膏火こうかを舉あげ

松間見層層 松間しょうまに層層そうそうたるを見る

散策桃榔林 散策さんさくす 桃榔林とうらうりん

林疎月鬢髻 林はやしは疎まばらにして月つきは鬢髻はうちせう

使君置酒罷 使君しくん 置酒ちしゆして罷やみ

簫鼓轉松陵 簫鼓しょうこ 松陵しょうりやうに轉てんず

狂生來索酒 狂生 來りて酒を索もとめ

一舉帆數升 一舉に帆すなわち數升

浩歌出門去 浩歌 門を出でて去れば

我亦歸曹騰 我まも亦また曹騰ぼうちやうに歸す

一昨年、すなわち元祐八年(1093)の今宵は、都に居て天子の輦に侍した。宴を賜つた宣徳門には、萬枝の燈籠が輝いていた。壁たまのような月が宮垣にかかり、珠のような星は、宮殿の棟でピカピカしていた。

昨年、すなわち元祐九年(四月改元、紹聖元年 1094)の今宵は、定州ていしゆにいた。老病の身ではあつたが、起きたつて、軍旗を押したつて賑う街を練り歩き、馬蹄は、春の氷をひびかせるほどだつた。

さて、今年、紹聖二年(1095)は、どうか。私は流謫りゅうたつされて江海のほとり惠州に居り、山中の僧房に寄寓きよぐしているが、やはり燈籠を掲げ、それが松林を透して幾段にもなつているのが眺められる。南方特有の桃榔樹とうろうじゆの林を散策すれ

ば、まばらな林の中は、月の光で亂れた髪かみの如くである。長官が、お酒を御馳走ごちそうしてくれた。それが終ると、樂隊は松陵の方に去つてしまつた。そこへ賈道人が訪ねて来て、酒を強請ねだり、みるみる數升を乾して、高歌放唱しながら去つてしまつた。そこで、私も、ふらふらと酔境よきやうに仿い込んでしまつた。

元祐八年から紹聖二年に至る三年間に、蘇軾の境遇は、「吾生如寄耳」の言葉どうり、變轉して、今や惠州に流謫される身の上となつた。この間、三たび經驗した上元の夜は、その境遇は、それぞれ異つてはいたが、いずれも樂しむことが出來た。特に、今宵は流謫の身を異郷いけいに置いてはいるが、その樂しさは、以前に劣らぬものがある。讀者は、この詩に流謫された詩人の悲哀を讀みとることはできない。いかに不遇な生活の中にも、それに應じた幸福な時間が、つねに存在する。したがつて、たとえ流謫の身ではあつても、すべてを悲哀で彩るべきではない。また、人生が「寄」なるものである以上、明年の上元をどういう境遇で迎えるかは測りえないが、それだけに、より幸福な時間も期待し

うるのだ。とすれば、今の蘇軾にとつて最も大切なことは、この夜を充分楽しむこと以外にはない。「上元の夜」の詩は、「委順の思想」を、蘇軾の體驗から、うたいあげたものだといえよう。

「上元の夜」よりは、漸ることになるが、元豐二年（1107）、蘇軾は、政治批判の咎で御史臺の獄に繋がれ、死と直面しなければならなかつた。この事件は、その波瀾に富む生涯に於ても、最も厳しい試練であつた。その獄中の作で、「予、事を以て御史臺の獄に繋がる。獄吏稍や侵さる。自ら度るに堪うる能わず。獄中に死して、子由と一別するを得ざらん。故に二詩を作り、獄卒の梁成に授け、以て子由に遺る」（卷十九）と題する詩の中、その第一首をあげよう。弟蘇轍への遺言の詩である。

聖主如天萬物春。聖主 天の如く 萬物 春なり
小臣愚暗自亡身。小臣 愚暗にして自ら身を亡ぼす
百年未滿先償債。百年 未だ満たざるに 先ず債を償

十口無歸更累人。十口 歸する無く更に人を累す

蘇軾詩論稿（山本）

是處青山可埋骨 是る處の青山 骨を埋むべし
他時夜雨獨傷神 他時の夜雨 獨り傷神

與君世世爲兄弟 君と世世兄弟と爲り

又結來生未了因 又た 來生 未了の因を結ばん

天子の恩は天の如く、萬物は春の如く豊かだというのに、私ひとりには、愚暗なために自ら身を亡ぼすに至つた。百年の壽命も全とうせず、はやくも債を償うことになつたが、十人の家族たちは落ちつくところもなく、さらに迷惑を及ぼすだろう。どこであろうと青山でありさえすれば、私の骨を埋めるにはよいのだが、後年いつか夜の雨音にひとり心を傷めることもあろう。君（蘇轍）とは、世世兄弟になつて、來生もまだ盡きぬ因縁を結びたく思う。

蘇軾は、今死に直面しているのだが、詩は、感情を流露することよりは、むしろ冷靜にうたわれている。そこには、死に對する恐怖とか、あるいは反抗的な姿勢はなく、人間にとつては自然な成りゆきとして、死を理解している。

「是處青山可埋骨」の一句は、「吾生如寄耳」という考え方から、當然豫期される人生の結末であり、かつて韓愈が

うたつた「好収我骨瘡江邊」(八五頁上) という投げ遣りともいふべき一句とは、對照をなす。この詩は、次にあげる出獄後の作と讀みあわせることによつて、さらにその性格を明らかにすることができる。蘇軾は、同年の十二月二十八日、許されて獄を出で、黃州へ責貶されることになつたが、出獄に際しての作に、「十二月二十八日、恩を蒙りて檢校水部員外郎黃州團練副使を責授さる。復た前韻を用う 二首」(卷十九) があり、獄中の作と同じ韻を踏んでいる。その第一首は、

百日歸期恰及春。百日の歸期 恰かも春に及ぶ

餘年樂事最關身。餘年の樂事 最も關身

出門便旋風吹面 門を出ずれば便旋として風は面を吹

き

走馬聯翩鶴唳人。馬を走らせば聯翩として鶴は人に

唳すし

却對酒杯渾似夢。却つて酒杯に對えば渾て夢に似

試拈詩筆已如神。試みに詩筆を拈れば已に神の如し

此災何必深追咎。此の災何必深く追咎せん

竊祿從來豈有因。竊祿 從來 豈に因有らん

百日にも及ぶ入獄生活を終えて歸ると、ちようど春だ。

これからは、餘生を楽しむことが第一。一たび門を出ると、なにかとまどうような氣持がし、春風が顔を撫でる。馬を走らせると聯翩として、喜びを報らせる鶴は、人前に騷しく鳴く。振りかえつて酒杯に向うと、なにもかも夢のように思われ、試みに筆を執ると、憑かれたように詩が湧き出る。このたびの災禍は、今さら深く咎めたる必要があるろうか。もともと祿を竊んでいたのだから、もとより原因のあることなのだ。

この詩が獄中の作と同じ韻で作られていることをみても、二首は、連作としての意識が非常に強く、むしろ一首の詩を讀むような讀み方を要求するであろう。前詩は、死に直面して作られていたが、この詩は、それとは全く異なる新しい境遇に於て作られていた。その特徴は、醫のない明るさにある。 「此災何必深追咎」とうたう如く、過ぎ去つた暗い日日は、もはや蘇軾の心を患わすことなく、彼は、今、豊かな春を楽しんでいる。この全く異つた境遇に於て作ら

れた二首の詩が、なめらかに連続しうるところに、蘇軾の「委順の思想」の眞價をみる事が出来る。

五 結

蘇軾の詩にみられる「のびやかさ」は、人生を不斷の展開として捉えたことに基く。古來うたわれてきた「人生如寄」の詩句に、彼は、新しい意義を與えた。人生の「寄」なることは、悲嘆すべきことではなく、新しい幸福論の基盤になりうるものであつた。

(一九六〇、八)

(補注八二頁下)

この詩は蘇轍と別れる恨みをうたつたもので、「我生如飛蓬」の句には、悲嘆がこめられている。この句と、「吾生如寄耳」の句との間には、間隙がある。この間隙は、蘇軾の成長とも關聯させて填めなければならない。